

法形容詞 *pur (vrai, simple)* に関する考察

山本 大地
(福岡大学)

pur, vrai, simple, franc, plein といった形容詞が名詞に対して前置されるとき、法形容詞 (*adjectif modal*) と呼ばれることがある。はじめにこの種の形容詞に言及した Milner (1967) がその名を与え、以降 Noailly (1999, 2002)、Salles (2001, 2004)、Riegel (2005)等が取り上げている。

法形容詞は概略「*dénomination* の適切性の度合いを表す形容詞」と定義できる。例えば *un pur mensonge* において *pur* は「*ce qu'on appelle purement mensonge*」のように、選択した N でもって対象を呼ぶ行為にかかっており、その適切性の度合いを強めていると理解できる。日本語にも「万引きは立派な犯罪ですよ。」「妻へのサプライズは見事な失敗に終わった。」といった例に見られるように、同様に捉えることができる形容詞の用法が存在する。

さて、上記一連の形容詞が *dénomination* の適切性を表すというように共通に捉えられるとしても、その表現方法、あるいはそれが意味するところはそれぞれ異なると考えられる。本発表では *pur* を中心に取り上げその特性を探る。

まず *pur* を特徴づけるために *vrai* との比較を行う。*pur* と *vrai* はどちらも「N と呼ぶに相応しい」という意味合いが感じられるが、両者には次のような本質的な違いがあると考えられる。*vrai* は N と呼ぶものの中でもより N と呼ぶに相応しいことを表すのに対し、*pur* は N と範列関係にある他の N を排除して N と呼ぶことが相応しいことを表す。このような違いは名詞の省略・代名詞化の可能性という統語的な振る舞いにも現れる。

続いて *pur* を単独に考察し、*pur* と共起する名詞の特徴、*pur* が使用される文脈の特徴等を手掛かりに *pur* の記述をさらに精密化することを試みる。

最後に *pur* と *simple* の比較を行う。*simple* は、一見「N と呼ぶに相応しい」という意味合いは感じられないが、*pur* の用例を *simple* によって言い換え可能な場合は多い。また、名詞の省略・代名詞化が不可能である点において *pur* と類似しており、さらに *pur et simple* のように等位接続が可能であることを考えると、両者は何らかのステータスを共有していると考えられる。